「食らうべき経済学」

高校卒業後、人生の目標を模索するなかで、「フリーター」並みにいろんな仕事に従事した。そして、たどり着いたのは東京下町のスーパーマーケット。そこで目にした光景は、世間知らずの私には衝撃的なものであった。

一代で八百屋をチェーン店にまで発展させた、たたき上げの社長と、その身内からなる重役たちのもと、平社員は中卒か、せいぜい高校中退という学歴で、年齢は10代から60代に及んでいた。彼らは普段、週６日、一日12時間働いていたが、やがて売り上げが落ちるや、30代半ばの常務に怒鳴り散らされ、さらに長時間の労働を強要されて、休日をとることもままならなかった。汗水垂らし、ごきぶりのように働いて、酒をあおりでもしなければやってられない日々。人としての誇りも生きる楽しみも、どこかに置き忘れるよう強いられた生活。

遭遇した現実のなかで精一杯反抗しながら、自らの非力に打ちのめされた私は、逃げるようにして、数年ぶりに大学受験の準備を再開した。「自ら卑下して学道を緩くすることなかれ」。

堪え忍んだ一年の後、大学に入学した私にとって、学ぶべきは、社会的弱者でも人間らしく生きていけるような社会を構想する社会科学であった。それは、より長期的な視野から、多様な個人からなる現実社会をありのままに説明して、人間生活をより充実したものにすべく、社会を変革するための材料を提供するであろう。各人が人間としてより自由に生きるために、「食らうための」経済学ではなく、「食らうべき経済学」。この思い込みが、研究者としての私の出発点であり、大学院時代の苦しい研究生活の拠り所でもあった。「泣くな、笑うな、理解せよ」。

大学に就職した後、私はあれこれの些事に忙殺されて、この初志をいつの間にか忘却の淵にしまいこんでいた。「食らうべき経済学」を追究する旅に立ち戻るのに、今はちょうどよい時期なのかもしれない。最後に、このような経済学の方向性を私に指し示してくれた人の近著を、以下に記しておく。

伊藤　誠『幻滅の資本主義　Capitalism in the era of Disillusionment』大月書店、2006年。

■資本主義経済の理論Ⅰ・Ⅱ
■経済システム論Ⅰ

岡田 和彦
（おかだ　かずひこ）

広島県出身。東京大学大学院修了。経済学博士(東京大学)。「資本主義経済の理論」「経済システム論」担当。若者は、よく学びよく遊ぶというメリハリのきいた生き方をするなかで成長する、との信念は、ナイーヴだとの評もある。